

白山信仰と泰澄

日本では古くから山を信仰の対象とした山岳信仰があり、それを修験の霊山とした信仰の一つに「白山信仰」があります。その歴史は古く、「泰澄」の存在を抜きにしては語れません。修行僧であった泰澄は白山に登り山の神を祭った最初の人物とされ天皇の病気も治したとされる不思議な人物です。彼の生きた奈良時代の書物には一切出てこないため実在が疑われることもあります。しかし、彼の足跡が伝えられる白山や文殊山をはじめとする山々で古代の須恵器がぞくぞく発見されていることもあり、泰澄のように山へ分け入った修行僧が各地に存在したのは間違いのないでしょう。このような人々を介して白山信仰は古代から中世にかけて広まっていたと考えられています。

さて、当地での白山信仰を物語るものとして南井町の片上神社に鎌倉時代に造られた十一面観音像ほか計 3 体の木像(市指定文化財)があります。これらは白山の3つの峰に鎮座した白山三所権現と呼ばれる神々の本地仏として旧白山神社で祀られていたものです。観音菩薩は現世利益をもたらすとされますので、それにあやかりたいという人々の願いがあったのかもしれませんが。

春先、市内から望む白山の姿は美しく威厳に満ちた姿をしています。泰澄もこの景色をみて神の存在を感じたのでしょうか。

参考 朝日町教育委員会「山の信仰を考える」2004(文化課 深川義之)



十一面観音菩薩坐像 (片上神社)